

地域と連携したキャリア教育プログラムにおける高校生の学びと架橋を促す要因に関する研究—岡山県立 A 高校の事例

Research on learning-bridging and learning of high school students in a career education program in corporation with the community

荒木 淳子
Junko ARAKI
産業能率大学
SANNŌ University

高橋 薫
Kaoru TAKAHASHI
早稲田大学
WASEDA University

佐藤 朝美
Tomomi SATO
愛知淑徳大学
Aichi Shukutoku University

〈あらまし〉本研究では岡山県立 A 高校のキャリア教育を目的とする地域と連携した探究型学習プログラムを事例とし、生徒の学びと教科学習との架橋（ラーニング・ブリッジング）について質問紙とインタビューによる調査を行った。その結果、教員や地域の大人の関わりや他の生徒との関わりが深い学習活動を促進し、他の授業とのラーニング・ブリッジングを促進していることが示唆された。

〈キーワード〉 高等学校 キャリア教育 ラーニング・ブリッジング 他者との関わり

1. 研究の背景と目的

OECD の調査では、日本の高校生は教科学習への自信や自分の将来のために教科学習をがんばろうとする気持ちが海外と比べて低く（国立教育政策研究所 2010）、学校での教科学習が将来の進路や社会へとつながる実感を得にくいことが課題とされている。文部科学省高等学校教育部会も 2012 年、「社会・職業への円滑な移行に必要な力」や「社会の一員として参画し貢献する意識などの市民性」を高校で生徒に最低限習得させるべき「コア」の内容と定め、キャリア教育の重要性を指摘している。実際に高校の普通科に行った調査では、ホームルーム活動や総合的な学習でのキャリア教育に関する時間の多い学校ほど生徒の汎用的技能は高かった（長田・清川・翁長 2017）。

しかし高校の普通科は、専門学科や総合学科に比べて体験的学習プログラムの実施や計画の割合が低く、キャリア教育は大学選択や進路選択に絞られがちである。普通科のキャリア教育においても体験的学習プログラムを実施するだけでなく、生徒が教科学習と将来の進路や社会とのつながりを意識し、学習への意欲を高められるようすることが必要と考えられる。

授業外の学習と授業での学習とを架橋する概念がラーニング・ブリッジングである（河井・溝上 2011；河井・木村 2013）。河井らは大学におけるサービス・ラーニングの研究において、ラーニング・ブリッジングが、学生の学びと成長にと

って重要であることを指摘している。高校普通科のキャリア教育においても、地域と連携した体験的学習プログラムと教科学習とのラーニング・ブリッジングを促すことが、生徒の高い学習意欲や教科科目の深い学びにつながると考えられる。

そこで本研究では、ラーニング・ブリッジングに着目し、高校の普通科におけるキャリア教育を目的とした体験的学習プログラムにおける生徒の学びを明らかにするとともに、生徒のラーニング・ブリッジングを促進する要因について分析を行う。そしてラーニング・ブリッジングを促す体験的学習プログラムの設計について考察を行う。

2. 研究の方法

本研究では岡山県立 A 高校の地域と連携したキャリア教育プログラム「マイドリームプロジェクト（以下、MDP）」を事例とし、A 高校 1 年～2 年生への質問紙調査と協力の得られた 8 名について半構造化インタビューによる調査を行った。

（1）プログラムの概要

MDP は生徒たちがそれぞれの問題関心に沿って地域をフィールドとして行う探究型の学習である。総合的な学習の時間を使い、高校 1 年生から 3 年生までが「教育」「社会の仕組み」「文化や歴史」等のテーマに分かれ、グループごとに調査課題を設定し、学習を進めていく。プログラムでは学校のある地域との連携を重視しており、学習の途中でテーマと関わりのある地域の大人へのインタビュー、地域でのフィールドワークのほか、

地元自治会との共催でお祭りの企画・運営などを行っている。学習の成果は12月にグループごとにポスターにまとめて発表した後、各自がレポートを作成する。

（2）質問紙調査

2018年12月のポスター発表会後に、A高校1年生と2年生229名（1年生126名、2年生102名）にプログラムでの学びとラーニング・ブリッジングに関する質問紙調査を実施した。

河井・木村（2013）よりリフレクションとラーニング・ブリッジングについて、「プログラムを通じて社会の仕組みや問題について考えた」「ほかの授業でも、MDPを思い出しながら理解を深めた」等13項目を尋ねた。またラーニング・ブリッジングを促進する要因として、木村・河井（2012）より他の生徒や教員、地域の大人との関わりについて、「他の生徒との話し合いで、他の生徒がどんな経験をしたか、何を考えたかを理解することができた」等15項目を尋ねた。いずれも「1.全くそう思わない～6.とてもそう思う」による回答を求めた。このほか自由記述でも、ラーニング・ブリッジング経験の有無などについて尋ねた。

（3）半構造化インタビュー調査

質問紙でインタビューに協力しても良いと回答した19名の生徒から活動テーマや自由記述への回答量を参考に8名を選び、2019年3月に一人約40分～1時間の半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は調査の趣旨を説明し許可を得た上で、全て録音した。対象者を表1に示す。

表1 インタビュー対象者

学年	性別	グループのテーマ
1年生	女	社会の仕組み
1年生	女	社会の仕組み
1年生	男	教育
1年生	男	自然・環境問題
1年生	男	社会の仕組み
2年生	男	社会の仕組み
2年生	男	文化や歴史
2年生	男	教育

4. 分析結果

（1）尺度構成

リフレクションとラーニング・ブリッジングに関する項目について因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子負荷量が0.4以下の項目を外した結果、10項目2因子が抽出された。第一因子は、「自分たちの活動の意味について考

えた」など、活動に深くかかわっていることから、「活動への深い取り組み」と命名した。第二因子は「他の授業とのラーニング・ブリッジング」と命名した。

表2 因子分析結果

	I	II
MDPを通じて自分たちの活動の意味について考えた	.975	-.098
MDPを通じて自分の学び方について考えた	.868	.032
MDPの活動を発展させていくために、必要な知識を積極的に調べた	.778	.010
MDPを通じて社会の仕組みや問題について考えた	.775	.043
MDPを通じて自分の価値観や考え方について考えた	.723	.197
MDPの活動での経験をきっかけに、関連する情報や知識を積極的に調べた	.590	.164
ほかの授業の内容について、MDPの経験と知識に結び付けて考えていた	-.058	.967
ほかの授業でも、MDPを思い出しながら理解を深めた	.008	.806
ほかの授業の知識を、MDPで活用・応用し	.148	.722
MDPの活動の経験について、より深く考えるために、本を読んだ	.079	.569
因子相関		.702

他者との関わりについても同様に因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った結果、「生徒同士の関わり」と「教員・地域の大人との関わり」の二因子が抽出された。性別、学年、テーマを統制変数とし重回帰分析を行った結果、ラーニング・ブリッジングの「活動への深い取り組み」には生徒同士の関わり、教員や地域の大人との関わりが、「他の授業とのラーニング・ブリッジング」には教員や地域の大人との関わりが、いずれも強く関係していた。またインタビュー調査では、生徒は他の生徒が活動する様子を見て学んでいることや、学習は教えてもらうのではなく自ら対象に関わっていくことであるとの学習観が生まれたこと等が示唆された。

謝辞

調査にご協力くださった全ての皆様に心からお礼申し上げます。本研究は JSPS 科研費 JP17K01150 の助成を受けたものです。

主な参考文献

- 河井亨・木村充（2013）サービス・ラーニングにおけるリフレクションとラーニング・ブリッジングの役割。日本教育工学会論文誌，36(4)，419-428
- 木村充・河井亨（2012）サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究—立命館大学「地域活性化ボランティア」を事例として—。日本教育工学会論文誌，36(3)，227-238